

「言語学的経験論」

——「文法」の概念に対する科学論的考察——

藤 井 文 男

“Linguistic Empiricism”: A Programmatic Propaedeutics

Fumio FUJII

Abstract

The present paper as a whole serves as a kind of propaedeutics for treating empirical data more deliberately from a theoretical point of view. At the example of some notions of grammar, theoretical as well as practical problems will be discussed rather programmatically in order to avoid terminological confusion.

It will be argued that evolving a theory of a certain object means explaining it in some way by way of building a model based on the data from the object in question in the sense that a object phenomenon can only be recognized empirically through mental perception. Furthermore, it is contented that a theoretical investigation must be continued ever further by involving a further field concerned in order to enlarge our empirical horizon because this is the only means for seizing reality.

「文法」という言葉ほど、言語学史上、多岐にわたって用いられた術語はないだろう：アレクサンドリア時代の「解釈(用)文法」に始まり、ヨーロッパ中世のいわゆる「規範文法」、Port Royal の「普遍文法」；近代になっても「学校文法」に代表される「伝統文法」、構造主義言語学に於ける「記述文法」、Chomsky 等による「生成文法」；はてはヨーロッパ語に於いては「文法書」自体も単に「文法」(Eng. *grammar* ; Fr. *grammaire* ; Ger. *Grammatik* etc.) と呼ばれる。¹⁾

更に、言語学に対する「科学性」の要求に伴い、「文法理論」という表現も用いられるようになる。一般に、「文法理論」とは「文法」に関する「理論」と理解されているわけ

1) Cf. ARENS (1969), COSERIU (1972) etc.

だから、「文法」という術語が何を指し示すのか、そして「理論」とはどんな概念なのかをはっきりさせない限り、「文法理論」も展開できないことになり、上記の言語学に対する「科学性」もこの意味では満たされないと考えられる。実際問題として、こういった言語学上の基本概念に対する異なる理解から言語学者間のコミュニケーションに支障をきたすということはきわめて多く、しかもこの種の混乱は更に「記述」とか「説明」といった、より基本的な「メタ理論」上の概念にまで及ぶのである。

言語学内部の専門分野の細分化が進み、また外郭に於ける境界領域の開発など、言語学に対する「科学性」の要求は言語学を経験科学とみなす以上高まる一方と言える。この時期にあたって、基本概念の客観的確立はもはや至上命令と言っていいだろう。基本事項に対する相互理解なしの議論は単に不毛なだけでなく、これまでの研究成果さえも徒らに否定しかねない危険性を内包するからである。

こういった諸事情にかんがみ、ここでは「文法」に関する問題の多いいくつかの基本的概念を明らかにするとともに、「言語」という現象の客観的把握のための基盤として、言語の二者間コミュニケーションに於ける機能を中心にすえた文法研究の方法論的部分的試案をいくつかの具体的な文法現象を例にして展開してみたい。

0. 方法論的序章

一般に、二者間コミュニケーションが成立するための条件のひとつとして「発話の対象の共通確認」を挙げることができるが、我々の直面する問題で言えば、「言語学」とはその性格に於いて何たるかを確認しておくことは、もはや最低条件と言わなければならない。²⁾そこで、ここでは問題提起としてまず、「言語学」的研究とはどんな活動を指すのか、という基本的な事項から問題を掘り起こしてみようと思う。

0.1 「科学」と「知覚」 「言語学」は図式的には「言語に関する科学」と言い換えることができる。ところで、「科学」もしくは単に「学」は一般に「知識を体系的に組織すること」と理解されているから、「言語学」とは「言語」に関する「理論」をたてる知的活動であると解釈してよさそうである。「学」は語源的にも「覚」に通じ、ともに「學」を旁り(!)として、「明らかなもの」つまり物事の「真理・真実」に基づく概念を表わす。子どもが物の真の姿をまねする・まなぶのが「学」であり、人間が五感を通して真実を認識するのが「覚」であって、³⁾ いずれも物の真理を前提としている点でも西洋の Lat. *scientia*

2) 言語学は例えば「芸術批評」等とは違ったカテゴリーに属すということに誰しも異論はないだろうが（実際には Voßler のような「美学的」とも言えるようなアプローチもあった。）、それならばそれなりの性格は方法論にも反映されるべきである。

3) 字形の上では五感のひとつである「視覚」を代表としているが、これはかなり普遍的なものと言えそうである。

(〈scire “知る・見ぬく”)、Gr. *theoria* (〈*theorein* “見つめる”)と同レベルで対応していると言える。⁴⁾

しかしながら、ここで重要なのは、「真実」は人間の知覚受容を通してしか把握できない、ということである。つまり、人は真実に迫ることはできても、真実そのものを直接手にすることはできないのである。⁵⁾ というよりはむしろ、「真実」なるものは最初から人間社会と別個に存在するものではなく、それ自体(人間の知覚を土台にした)極めて人為的な概念であると理解する方が合理的かもしれない。それだからこそ、「知識を体系的に組織する」こと、即ち理論を立てるという作業が真実に迫る方法として意味をもってくるのであって、この作業を通して——即ち、体系化された知識(=「理論」という手段)によって——のみ人は自分の知覚と矛盾なく物事を把握できるわけである。

0.2 「理論」の機能 さて、「真実」が人間の「知覚」に基いた概念だとすると、物事の真実を捉えようとする「理論」は「知覚」と矛盾するものであってはならない、ということになる。つまり、「体系化された知識」は人間の「知覚」を何らかの形で満足させるものでなければならないのである。⁶⁾ そして、ここに理論の完成度に対する尺度が存在する。⁷⁾

一般に、既にわかっていること——即ち「知識」と呼ばれる概念——は人間の知覚に矛盾しないと言っていい。そこで未知の現象の真実を究めようとする場合、その現象から断片的に得られる知覚より必然的に導かれる結論を、それまでに蓄積されている「知識」を以って追体験(=間接的経験)できるかどうか判断する、という手法をとる。これが一般に「説明」と呼ばれる概念にあたる。

未知の現象ではあっても、「現象」として意識される以上、人間の知覚に直接訴えるものは必ず何かあるはずだと考えられる。この時、対象から知覚的に受容されたものをここでは「データ」と呼び、データをとることは「記述」ということにする。総じて言えば、「理論」とは「記述」された「データ」から「推論」できる結果を蓄えられた「知識」によって経験的に「説明」する体系であると理解できるわけである。

0.3 「経験科学」と「推論」 論理学でいう「真理」に二種類のカテゴリーがあることはよく知られている。例えば：

- 4) 先に挙げた「科学」と「知覚」の関係は、直接にラテン語の *scientia* を系統的に引かなくても Ger. *Wissenschaft* のような(新)造語などにも表われている (cf. Dutch *wetenschap*)。
- 5) 文字通り「手にした」ところで、物体は「触感」を通してしか受容されない。
- 6) ある理論に一旦知覚に矛盾するような部分があっても、「真実」に迫った「理論」であれば、より総合的な観点からみるとその矛盾は究極的には氷解し、必ず人間の「知覚」で裏づけられるはずである。また逆に、どんな抽象的な理論であっても、人間の「知覚」との接点は必ずどこかに存在するはずである。
- 7) POPPER (1934) の “Prinzip der Falsifizierung” もこの意味で捉えることができる。

- (1) a. All human beings are mortal.
 b. Sokrates is a human being.
 c. (Hence,) Sokrates is mortal.

(1a) と (1b) はそれぞれ「経験的真理」に属するが、(1c) は一般に (1a-b) をそれぞれ大前提・小前提」とするとき「論理的真理」として扱われ、推論の正しさは (1c) の「経験的真理」によらないとされる。

似たような例として：

- (2) “3つの数 a , b , c の間に $a = b$ 並びに $b = c$ が成り立つとき、 $a = c$ は常に成り立つ。”

というのがあって、代数の「公理」として認められている。

しかしながら、これらの「論理的真理」にしても、「知覚」に基づく「経験的真理」と無関係に存在しているわけではない。(1)–(2)のような推論も常に経験を通してのチェックが可能であって、むしろ逆に経験から抽象化され、形式化されたものと考えべきだと言えよう。前提が満たされる場合、一般の論理体系・代数体系内に例外が存在しないだけのことなのである。言い換えれば、この種の推論は誰しも認め得る、人間の知覚を共通に満足させ得る普遍的な「知識」として理解できるというだけに過ぎない。

ということは、「理論」の対象として「説明」された「現象」は、少なくとも論理的には上に挙げたような公理ないし定理として次の推論の前提として機能し得るわけで、この繰り返しにより部分理論は全体理論へと発展していくと考えられる。いわゆる「経験科学」に於ける理論構築がデータ収集とその分析・総合の単純作業の繰り返しを通して導かれる仮説により成り立っていると理解される理由は正にここにあると言っていい。⁸⁾

以下では、これまで述べてきた「科学」の概念に沿って「経験科学」としての言語学のもつメタ理論的問題点を「文法」の概念に焦点を絞って考察してみることにする。

1. 文法研究に於ける科学論的諸問題

「文法研究」が言語現象としての「文法」を対象とするのは明らかだが、既に導入部で述べたように、言語学史上「文法」という術語は必ずしも固定した概念に使われておらず、ターミノロジー上さまざまな問題を引き起こしている。特に問題となるのは Chomsky 等

8) 「科学」に関しては、先に挙げた「知覚」との関連の他に「反復して確かめる」の系統の語彙をあてる言語も多い (cf. Russ. наука)。

による「生成文法」で中心的テーゼになっている「文法」＝「理論」という図式に妥当性があるかないかという点である。⁹⁾そこで、ひとつのテスト・ケースとして、ここでは言語学を「経験科学」として扱うことを念頭にこの問題にアプローチしていくことにする。

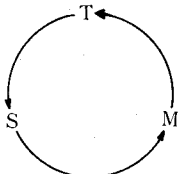
1.1 「モデル」vs.「説明」 一般に、実体のわからない現象を一定範囲で科学的に把握しようとする時、我々はまず個々のデータを収集し、そのデータを分析・総合することによって当該の現象を人為的に再現する「モデル」を組み立てようとする。¹⁰⁾これは科学論的に表現すれば、“現象”の「理論的再構」ということになるだろう。0.2項で、ある「現象」として意識される「対象」に関して、人間の「知覚」に直接働きかけるもの(＝「データ」)から必然的に「推論」される結果というのがこの「モデル」という概念に相当する。

あるモデルがその元となった“データ”を完璧な形で再現する時、モデルは現象の“実体”と“isomorphy”をなすと言い、一定の限度で“現象”は科学的に把握できたと理解される。それでは、このモデル自身が即ちその「対象」となる現象に関する「理論」であると捉えることができるだろうか？

前にも述べたように、「理論」とは現象の真の姿に迫るための手段で、「対象」を「記述」し、かつ「説明」するものと理解されており、対象である現象が何らかの形で説明されない限り、即ち「対象」に関する何らかの「知識」が新たに蓄積されるのでない限り、完全な形での「理論」とは言えないことになる。¹¹⁾

ところが、単に「対象」と“isomorph”であるだけの「モデル」は単に「データ」の「理論的再構物」に過ぎない。ということは、「モデル」自身は「データ」に関しては何も「説明」しないということになる。「モデル」自身は「データ」を基に一般化・抽象化されたものだから「モデル」と「データ」は同値関係にあるわけで、このことは当然のことと言わなくてはならない。つまり、「モデル」は「理論」全体からみると「データ」以上のことは何ひとつ言っていないのである。

ひとつ例を挙げてみよう。歴史的言語学で有名な法則にいわゆる「グリムの法則」というのがある：

(3)		<u>PIE</u>	<u>Germanic</u>	
		p t k >	f θ x	Lat. <i>pater</i>
		bh dh gh >	b d g	Ger. <i>Vater</i>
		b d g >	p t k	Eng. <i>father</i>

9) 個々の点に関する評は GIVON (1979) に詳しい。

10) 既に 0.2項でも示したように、データ収集にも一定の「理論的前提」を必要とするが (cf. 1.2), ここでは問題を簡潔にするため、データ採集の対象ははっきりしているものとする。

11) ここでは実証されている陳述を「経験的」、そうでない陳述を「仮說的」と呼んで区別する。

ゲルマン語 /f/ と非ゲルマン系印欧語 /p/ の対応は「父」ということば個別のものでなく、他の相当語にも一般化し得る現象だと言うことである。つまり、この図式は文字通りひとつの「モデル」を表していることになる。

このモデルはしかし、例えばラテン語の *corun* はなぜ英独語で *horn/Horn* という形で現れるかということ「説明」しているだろうか？ そうでないことは明らかである。¹²⁾ 逆に *Horn* と *cornu* のような対応関係のひとつひとつがデータとなって(3)のような「モデル」を構築させたと考えるべきだろう。「説明」に関するものがあるとすれば、それはある時期に——ゲルマン語が他の印欧語から分離した時——当該の「音韻推移」が起った、という仮設部分だと考えられるが、これとて「ゲルマン語起源論」とでも称する「理論」の一部であって、ここに挙げた「モデル」そのものが「説明」しているわけではない。順序としては、「音韻推移」という理論上の創造的言語変化現象を仮定すること自体が「モデル」の存在をも「説明」することになるのである。¹³⁾

これと明らかに異った性格の法則のひとつに、例えば近代力学の基本とも言うべき「ニュートンの法則」がある。ここでのデータとしては、単に物体の落下所要時間と落下距離の対応関係しかない。ところが、この法則では「重力」という「理論上の構成物」を仮定することによって、データ間の対応関係だけでなく、「物体の落下」という自然現象全体——「物体はなぜ落下するのか？」——を合理的に「説明」しているのである。¹⁴⁾

1.2 「文法」とは何か？ 先に述べたように、「データ」は「理論」として「対象」のもつ直接人間の知覚に訴える特性だから、当然のことながら理論外・理論以前の存在と解釈すべきである。

しかしながら、データをとるための枠組みを設定するためには既に相当の理論的背景を必要とする。何をデータ採集の対象とするかが事前に整理されていなければならないからである。つまり収集したデータをどう処理し、それから何を導こうとするのか、ある程度の構想が出来上がっていることが前提となるわけである。そしてこれはデータのナイーブな「モデル化」を伴うことが多く、対象の「定義」は自動的に「仮説的」となる。¹⁵⁾ そこでここでは、「文法研究」の対象として「文法」と呼ばれるべき言語現象を「作業仮説」的に「定義」してみたい。

12) ここで問題にしているのは、いわゆる「グリムの法則」全体ではなく、もちろん(3)の「モデル」そのものに限定している。

13) 逆に、個々の「データ」の一般化である「モデル」が「ゲルマン語子音推移」(字句通りの意味で)という「仮説」を導くための前提となったと考えてもいい。

14) ここでは詳しくは触れないが、比較言語学関係では「グリムの法則」に於ける例外を、原ゲルマン語に於けるアクセント位置の変化という「仮説」で「説明」したいいわゆる「ヴェルナーの法則」も「理論」として考えられる。

15) 全くゼロからの理論構築はあり得ないからである。先に「理論」とは「知識の集積」である、と述べたのも同じ理由による。

「文法」という以上、それが何らかの規則性を意味していることは容易に想像がつくが、実際に同様の状況下で同様の発話行為は同様の効果をもたらすと考えられる。これは、ある言語集団に属する人間は同様の状況下に於ける同様の発話の際の物理的音響効果を同様と判断し、また心理的效果も同様に受容するという、いわば普遍的知覚能力に基くと認められるからで、¹⁶⁾ この意味でも SAUSSURE (1916) に於ける「言語の記号性」の仮説は有効であると考えられる。すなわち、発話の際の「音声」という「表現」は、その「意味」という「内容」と「発話情況」¹⁷⁾ のもとで規則的に対応していることになる。この対応関係の集合を「文法」と呼ぶことにすれば、「文法」は機能的には(音声)言語による二者間のコミュニケーションを機能させるための「制御装置」と解釈することができて、音声言語コミュニケーションが実際に機能する現実に対する我々の直感にも矛盾しない。¹⁸⁾

1.3 「文法」と「文法理論」 「文法」を「表現」と「内容」の対応関係の集合とみるとき、「表現」も「内容」もそれぞれ集合とみなしうる。つまり、「文法」を記述するにはまずこの両方の集合の実態を明らかにすることが先決ということになる。

しかしながら、音声言語コミュニケーションに於ける「表現」について言えば、それは物理的には単に音波、またはその形式の集積に過ぎない。また「内容」も種々雑多であって、データだけを目の前にしても一般には手のつけようのないことが多い。ということは、理論的には分析の可能性が無限にあるわけだが、この分析の基盤を与えるのが「文法理論」であると考えられる。例えば、いわゆる「文法のカテゴリー」等の定義は、文法現象を記述するのに必要な手段の人為的な設定にあたるわけだから、記述の対象である「文法」そのものの問題ではなく、記述の枠を形成する「文法理論」に属することがらということになる。つまり、文法研究においてデータの分析は恣意的であってはならず、究極的には「対象」である「文法」という現象を何らかの意味で「説明」するような方向でなされなければならないのである。前に「理論」はゼロから始まるのではなく、常に今まで蓄積された「知識」を基に出発するものと述べたのもこの理由による。すなわち、新しいデータもこれまでの理論に矛盾するものであってはならず、この意味で既存の理論に従って分析できるはずなのである。

そして、分析を通じて「モデル」として再構された「データ」は「文法」という対象の

16) 現実にはこのような「理想的」情況は得られないことから、かなり仮設的な陳述ではあるが、これを否定したところで、この陳述でカバーできない事象をより合理的に説明できるようになるとはこの範囲では一般に考えられない。

17) 「発話情況」の理論的処理方法はいろいろ考えられるが、一般的には一種の「インデックス」として扱うのが一番自然であるように思える (cf. MONTAGUE 1974: KEMPSON 1975 etc.)。

18) この考え方は、「文法」を「音声構造」に「意味構造」を割り当てる「手段」とする見方と基本的に一致する。

もつ特性を浮き彫りにし、体系的な考察を可能なものにする。こうした作業から得られる結果は人間の「知覚」に矛盾することなく新しい「知識」として「理論」の中に組み込まれていくわけだ。公式としては、我々はこれまでに蓄積されている「文法理論」を活用して新たなデータを収集し、「対象」である自然言語の「文法」を「モデル化」を通じて把握して「説明」する、と捉えることができよう。

さて、既存の文法理論に従ってデータを収集・分析した結果が部分的に当該の理論に背反するような場合は、どう処置したらいいのだろうか？ 原因としてまず第一に考えられるのは、データの分析に不備があるということだろう。しかし、これは末梢的な技術的事故であって、理論上の問題にはならない (cf. 1. 4)。より深刻なのは、データそのものに手違いはないのに矛盾が生じる場合である。この矛盾は「対象」の設定に直接問題がある時と、分析結果が既存の知識に対して矛盾を起す時があるが、いずれも土台にした理論そのものの欠陥であって、その理論は早急に修正を必要とする。

以下では、この辺の事情を実例をとって概観してみよう。

1.3.1 前提の不備による矛盾 中国語に於いては、「形容詞」も「自動詞」も形態的な対立を示さない。そこで、この場合ふたつの品詞の区別を：

- (4) a. 張三很大。
 b. *張三很跑。
 c. 張三 (快) 跑。

(4)のデータなどに基いて：

- (5) “形容詞は「很」で修飾できるが、自動詞の「很」による修飾は非文法的である。”

とした場合、今度は他動詞と自動詞の区分に際して、ひいては「動詞」と「形容詞」という品詞分け自体に矛盾が生じる：

- (6) a. 張三很有錢。
 b. 張三很喜歡中国菜。

(6)のようなデータはいくらでも出て来るからである。つまり、「很」による修飾の可否は品詞にとって弁別的にはならないことになる。このことは逆に、他に何か積極的な必然性を示すデータが見つかるまで、中国語に於いて少なくとも「形容詞」と「自動詞」の区分

は理論上重要でないということを物語っていると解釈すべきだろう。¹⁹⁾

1.3.2 推論上の矛盾 ドイツ語の語順の問題に関して、LEHMANN (1971) は16世紀中葉から後置詞的用法の増加——(*von*) *Rechts wegen*, (*an*) *deiner statt* etc.——を(ラテン語の影響による)副文中の動詞後置パターンの増加に対応させている。LEHMANN (1972; 73) に従えばしかしながら、動詞と目的語の相対的位置関係が他の修飾語の被修飾語に対する配置を決定するはずだから、ドイツ語は動詞後置を(ラテン語から)借入した時点から LEHMANN (1971) の観察どおり日本語のような後置詞を使い、形容詞を名詞に前置させるような言語に変化していくはずである。前述の後置詞に関して言えば、前置詞のみで後置詞のまったくなかったドイツ語だから、動詞後置導入の影響で前置詞表現はまだ完全には駆逐されないとしても、かなりの部分が後置的表現に置き換っているはずである。

しかし、現実のデータはどう出ているか? Lehmann の推論による結論に反し、現代ドイツ語は当時新しく用いられた後置的用法を *wegen eines Unfalls*, (*an*)*statt dieses Buches* のように完全に前置詞的用法に同化させてしまっているのである(cf. FUJII 1985: 44f.)。

このように現代ドイツ語からのデータは Lehmann の言語変化の理論を根底から覆し、もはや部分的な修正は効かない。つまり、彼の「理論」はこのデータが「反例」として機能することにより「反証」されるわけである(cf. 2.3.1)。

1.4 「文法」と「説明」 「文法」の「記述」に用いられる語彙が「文法理論」で定義されるものだとすると、記述された内容、即ち「規則性」またはその集合そのものが(生成文法に於いて言われるように)「文法」という現象を「説明」すると言えるのだろうか? つまり、「文法」に関する「理論」とみなすことができるのだろうか?

ひとつの典型を見てみよう(cf. 1.1)。ある自然言語の文法的規則性に:

(7) “定形は動詞語尾 *-na* によって標示される”

というのがあるとする。この「規則性」は、この言語に例えば *-pa* という語尾をもった

19) 他の言語に於いては当該の区分は「文法のカテゴリー」として認めるべき理由が存在する場合がある:

a. John is *tall*.

b. John is a *tall* boy.

a'. John *sings* well.

b'. John is the boy *singing* (**sing*[s]) in the bathroom.

ここでは、カテゴリー上の対立を認めることが、形態上の区別を少なくとも形式的には「説明」していると考えられるからである(cf. DRAGUNOV 1952)。

定形がなぜ存在しないのかを「説明」しているだろうか？ また、この種の定形の部分的存在は、それを例外と認めないとき、この“理論”を反証するものなのだろうか？

同じ言語に：

- (8) “語尾の *-na* は語幹が両唇音で終わる場合、*-ma* に変化する”

という形態音韻規則があるとき、**-pna*/**-bna* などのデータは(7)―(8)の規則、またはこれらの適用順序によって「説明」されているのだろうか？ 前述の1.1項でみたように、我々の理解する範囲ではこれらの規則は個別データからの一般化であり、一種の「モデル」として現象を「説明」する「陳述」とは認められないのである。²⁰⁾ また、仮りに *-pna* 等の形式が例外でなく文法的だとすれば、(8)の規則は「理論」的に否定されるのではなく、単に「記述」が不適当なだけに過ぎない。真の「説明」とは例えば：

- (9) “*/-n/→[-m]/[+labial]*___ の変化は同化現象による”

とか：

- (10) “語尾の鼻子音が同化的に中性化を起こすのは、この位置で音韻的対立がなく弁別機能に支障をきたさないから”

のような陳述であって「規則性」そのものではないはずである。

このように、「モデル」が常に「データ」と全く同じレベルにあって、その内容が元のデータで直接チェックでき、結果は「正」か「誤」で示されるのに対し、「説明」は内容のチェックに元のデータとは全く異った次元のデータを要求し、しかも判断は「適・不適」もしくは「良し悪し」などのスカラでしか示されないのを特徴としている。だからこそ(9)―(10)のような「説明」的陳述は、「理論」を「反証」に導くような可能性「反例」のタイプを最初から明示しているのである。²¹⁾ すなわち、「文法」の記述そのものはまだ「理論」

20) もし、これを「説明」と解釈するならば：

a. “12は3で割り切れる”

b. “3の倍数は3で割り切れる”

bはaを「説明」していると言わなければならない。

21) (9)に対しては更に別種の同化現象 (*/-t/→[-p]/[+labial]*___, */-l/→[-n]/[+nasal]*___ etc.) が証左となるし、他の位置で *[-bn-]*, *[-fn-]* 等が存在すれば、それは直ちに反例となる。

(10)の場合、*-ma* のような動詞語尾が他の機能を担っていることは最大の反例となることは一目瞭然である。

とは認められない。

2. 「データ」から「説明」へ——経験的方法論の実践

前節までの考察で、我々は一般的に人間の知覚する現象の真実を把握するための方法として理論構築という作業を掲げ、その一例として文法研究に於ける理論的諸問題にいくつかの実例を通してメスをあててきた。これまでに確認したことは以下のとおりである：

- (1) a. 「真理」とは人間の「知覚」を土台にした人為的概念であり、「真実」を把握するための「理論」はその究極において「知覚」を満足させなければならない。
 b. 「理論」は「知識」を体系的に組織したもので、「対象」についてデータの採集・分析に経験的基盤を与え、「対象」を「モデル化」による理論的再構を通して把握して最終的に何らかの意味で「対象」を「説明」する役割を果たす。

本節ではこれらの基本的確認事項を基に、文法研究に於ける具体的な問題に対して部分理論を展開してみたい。ここで選んだのは中国語の語順問題に於けるいくつかの関連現象である。²²⁾

2.1 出発点 ある種の文法カテゴリーの間に互いに並存しやすいものとそうでないものがあることは、個別言語の枠を越える特徴としてかなり前から意識されていたが (cf. SCHMIDT 1926 etc.)、この言語類型論的研究は GREENBERG (1963) に至って言語普遍論とタイ・アップすることで独自の研究領域を確立したと言える。彼は、修飾表現の配置と文成分の語順で特に並存しやすいものを次の二つの系統にまとめあげた：²³⁾

- | | | |
|---------------------|----------------|-----------------|
| (2) a. VSO/Pr/NG/NA | where: V=verb | Po=postposition |
| | S=subject | N=head noun |
| | O=object | G=genitive |
| b. SOV/Po/GN/AN | Pr=preposition | A=adjective |

GREENBERG (1963) では単に「ハーモニー」と性格づけられたこの語順に関して並存関係にある個々のカテゴリーのうち「文成分」の配置は Lehmann 及び Vennemann の歴史的語順変化理論に於いて決定的・支配的役割りを担うようになる：

22) ドイツ語に於ける類似の問題点については FUJII (1985) で扱った。なお、中国語の問題について詳しくは FUJII (1983) 参照。

23) もちろん方法論的に疑問の余地がないわけではない (cf. FUJII 1984)。データ上の個々の問題については BECHERT (1976), HAWKINS (1979; 80) 等を参照。

- (13) "VO order determines the use of preposed governors, or prepositions; OV order determines postposed governors, or postpositions."

(from: LEHMANN 1972: 983)

- (14) [Operator {Operand}] ⇒ $\begin{cases} \text{[Operator [Operand]] in OV languages} \\ \text{[[Operand] Operator] in VO languages} \end{cases}$

(from: VENNEMANN 1972: 81)

いずれの場合も 1.3 項で簡単にふれたように、何らかの原因で——LEHMANN (1971) のように「借入」にせよ、または VENNEMANN (1974; 75) のように「内因」的であるにせよ——「動詞」とその「目的語」の文中に於ける位置関係が変化すれば、他の規定関係の語順も次第により「ハーモニック」な関係へと変化していく、という仮説を立てるに至る。

2.2 既存の理論 上述の類型論的研究は言語の普遍性を追求したものだが、これから出発して類型的特点を基に中国語の語順問題に再考を加えようとした研究に LI/THOMPSON (1974) がある:²⁴⁾

- (15) a. 張三打破了杯子。
b. 張三把杯子打破了。
c. 杯子被張三打破了。

中国語は昔から (15a) のような語順をとる「動詞中置」の言語であると言われてきているが、「有標」と解釈されるにしても (15b) のように目的語——ここでは「杯子」「コップ」——を「把」という虚詞 (= 助辞) を介して動詞——ここでは「打破」「こわす」——に前置させる形式も存在する。ということは (15b) は動詞後置のパターンを示し、また受動態を表わす「被」を使った構文も (15c) のように動詞は文末に置く。

LI/THOMPSON (1974) は (15b) のようないわゆる「把構文」の近代に於ける普及を中国語の「動詞中置言語」より「動詞後置言語」への移行の結果とみる仮説をたてた。彼等の根拠にしているのは GREENBERG (1963) に於ける類型的パラメータは他が全て「動詞後置」パターンの言語のそれと一致するという点である (cf. 12b):

- (16) a. 書在桌子上。 '本は机の上にある。'

24) 他の中国語に関する類型論的研究について、詳しくは FUJII (1983) 参照。

- b. 這是張三的书。 ‘これは張三の本だ。’
 c. 張三是好人。 ,張三はいい人だ。’

問題の箇所は (16a-c) から一目瞭然のように、確かに「動詞後置」型のパターンを典型的に示す日本語等と全く同じ語順をとる。そして、これらのデータから LI/THOMPSON (1974) は Lehmann/Vennemann の理論を退け、語順に於いて支配的なのは文中に於ける動詞とその目的語の相対的位置関係でなく、形容詞を代表とする修飾語とその被修飾語の配置であるとの結論に至るのである。²⁵⁾

2.3 「データ」の再検討 ある言語についてその基本語順を判定する際——GREENBERG (1963) の “Basic Order Typology” の線に沿うことを前提とする限り——、最も重要なのが「動詞」の確認方法である。既に GREENBERG (1963) に於いて問題の多いこの点に関して (cf. FUJII 1984), LI/THOMPSON (1974) はただ無批判にフレームを取り入れるだけで再検討を加えようとしていない。

更に重要なのは、もし中国語の基本語順が統辞体系の原則として「動詞後置」の方向で変化し続けているのなら、その変化を直接的に具現化した (15a)→(15b) の他にもこの変化に附随する何らかの統辞的变化が期待できるはずである。少なくとも「動詞前中置」の原則に基づくような変化は不自然だと考えられる。しかし Li/Thompson は彼等の同じ問題に関する他の一連の論文でもこの点についてはほとんど言及していない。²⁶⁾

以下ではこの二点について改めて再検討を加えることにする。

2.3.1 「動詞」とその統辞機能 「文法」の記述に際して我々が念頭に置かなければならないのは、我々の理解する「文法」とは「表現形式」と「意味内容」の対応関係だということである (cf. 1. 2)。ということは、記述の中心になる種々の「文法カテゴリー」もこの前提に従って定義されるべきだということに他ならない。これは「動詞」というカテゴリーも「文法カテゴリー」として「形式」と「意味」の両面を備えた概念として扱わなければならないということの意味する。

ところが、一般には：

- (17) a. Eng. John wrote a letter, using an expensive fountain pen made in Italy.
 b. Fr. Jean *écrivait* une lettre quand Pierre *a entré* dans sa chambre.
 c. Ger. Maria bekam zum Geburtstag eine Puppe *geschenkt*.

25) 確かに修飾的形容詞の被修飾語である名詞への位置関係は古代中国語から現代中国語に至るまで「前置」で一定している。

26) Cf. LI/THOMPSON (1974a; 76; 76a; 77).

(17a-c) で下線を施した表現は全て「動詞」と呼ばれる。しかし、「基本語順」について語る時、これらの全てを同一に論じることはできない。統辞上の機能がそれぞれ異なるからである。文中に於ける「基本語順」というからには、ここでいう「動詞」とは「文」という文法カテゴリーに密着した概念とみていいだろう。そこで、作業仮說的に、「動詞」とは「文」という統辞上の単位を成り立たせるために必要不可欠の要素として定義する。ということは、「動詞」の概念も何をもって「文」とみなすかにかかってくるわけだが、²⁷⁾ここでは我々の「文」に対する直感を反映させた条件として、実際のコミュニケーションの場で発話される可能性のある表現のうち、次の要件を満たした最小単位を「文」と定義しておく (cf. FUJII 1984; 85):

- (18) a. 指示体として言語外世界に於ける「事象」を表現している。
- b. 発話者の言語外事象に対する「態度」を表現している。
- c. 聞き手を特定の行動に駆り立てる。

この条件にかなう発話としては (17a-c) であれば次のような形式をとることになるかと思う:

- (19) a. Eng. John *wrote* a letter.
- b. Fr. Jean *a écrit* une lettre.
- c. Ger. Maria *bekam* eine Puppe.

これは我々の「文」に対していただいているイメージにほぼ一致し、かつ発話情況に対して「無標」またはそれに近い形として「基本的」であると認めることができる。ここで興味深いのは、(18)の文成立のための条件のうち二つまでが「定形」という形式をもって表現されることである。²⁸⁾ここに「定形」を統辞上の中心とみなす理由がある (cf. FUJII 1985)。ということは、ここで挙げたヨーロッパ語について言えば、問題の「動詞」という概念は形式的には「定形」という概念になると思う。つまり、「文」は「文法カテゴリー」として「定形」でマークされ、(18a-c) を内容にもつ、と言えるわけである。

27) 「文」に対しては既に多数の定義づけの試みがなされている (cf. RIES 1931; SEIDEL 1935 etc.).

28) 具体的には、語彙上のカテゴリーとしての「動詞」が (18a) の意味上の枠組みを与え、「定形」という形態が訪順・イントネーションという形式と共同して (18b) の内容を明らかにする。(18b) に関しては以下の例を参照:

- a. Hans kommt morgen.
- b. Kommt Hans morgen?
- c. Käme Hans doch morgen!

この辺の事情は中国語ではどうなっているだろうか？ よく知られているように、中国語には「定形」という概念は存在しないと言われている。しかし、これは中国語に於いては「動詞」が単に人称変化をしないというだけのことである。実際問題として、(18b)はやはり中国語に於いても「動詞」にマークされる：

- (20) a. John *buys* books.
 b. 張三買書。
- (21) a. **Does** John *buy* books?
 b. 張三買不買書？
- (22) a. John **doesn't** *buy* books.
 b. 張三不買書。

(20)と(21)の比較から明らかなように、話者の「命題態度」(=18b)のオペレーションは中国語でも「動詞」に対して行なわれているのである。²⁹⁾ ということは、中国語の場合でも「動詞」とみなされる表現は機能的には「定形」と全く同値ということになる。

ここでもう一度、Li/Thompson が「中国語動詞後置説」の例証としている (15b-c) に戻ってみたい：

- (23) a. 張三把杯子打破了。(=15b)
 b. 杯子被張三打破了。(=15c)

もし Li/Thompson の説くように、中国語が「動詞後置」のパターンへと変化しているのなら、その典型例として挙げてある (23a-b) の場合、「動詞」は「打破了」となるはずである。中国語の否定文は肯定文に於ける「動詞」に否定詞「不」を、また完了相の場合「没有」を前置するから：

- (24) a. 張三看了那本書。
 b. 張三没有看那本書。

29) 北京を中心とした北方方言では (21b) の他に「張三買書不買？」という言い方もあるが、「動詞」に対するオペレーションであることに変わりはない。

(24) にならって(23)も：

- (25) a. *張三把杯子沒有打破。
b. *杯子被張三沒有打破。

となるはずである。ところが (25a-b) は予想に反して非文法的で、文法的なのは否定詞を「把」または「被」に前置させた形となる：

- (26) a. 張三沒有把杯子打破。
b. 杯子沒有被張三打破。

これまでの推論から導けることは、(15b-c) のような構文に於いても「動詞」は「後置」でなく、どちらかと言えば「中置」であると判断した方がより合理的だと言わなければならないということなのである。少なくとも、(24)の「看」などに比べ(15b-c)の「打破」の「動詞性」は非常に低く、表面的に「中国語動詞後置説」などその萌芽としてさえ到底立てられないはずである。

2.3.2 繫辞の発展と「動詞中置性」 前項2.3.1に於ける考察の結果、我々は Li/Thompson 等の仮説とは逆に、中国語は「動詞中置」の言語として理解すべきだ、という結論に達した。そしてこの仮説は同時に、「動詞中置」は中国語の根本的な統辞原則であると解釈することによって、更に何種類かの、表層ではそれぞれ無関係にみえる並行的統辞構造の変化を互に関連づけ、しかもその発生理由をも部分的に「説明」できるのである。ここでは繫辞の発生とその過程を例に「動詞中置性」との関連を概観してみることにする。³⁰⁾

よく知られているように、上古中国語にはいわゆる繫辞はなかった：

- (27) a. Arc. †孔子聖人(也)。
b. Arc. †孔子(是)聖人。

主語と述語は(27a)が示すように直接結ばれ、英語の *be* 動詞に相当するような機能語は介在しない。文末の「也」は強調の助辞として理解され、文法的に必須ではない。このことは上古末期に現れた同じ機能の「是」についても言えるのである。

30) その他の関連構造に関しては Fujii (1983) に詳しい。

ところが (27b) の系統を引いた現代語では：

- (28) a. *張三学生。
b. 張三是学生。

(28a) のように名詞構文の場合、「是」を欠いたものはもはや非文法的となる。つまり、「是」は現代語に於いては明らかに「繫辞」として機能しているのである。次の例が示すように、「是」の「動詞性」は疑いの余地がない：

- (29) a. 張三不是学生。
b. 張三是不是学生？

ここで重要なのは、この繫辞「是」の発生した文中の位置である。もし、中国語が Li/Thompson の主張するように「動詞後置」型の言語に発展してきたのであれば、定形的な意味での「動詞性」の非常に強い繫辞は当然のこととして文末に発生させたはずである。つまり、この文中の繫辞発達位置は、「動詞中置」を中国語が根本的な統辞原則としていと仮定して初めて「説明」がつくわけである。

2.4 「理論」の段階性と展望 前項 2.3 に於けるデータ分析のうち、前半 2.3.1 で我々は中国語では「定形」の機能をもつ表現は文中に中置されることをつきとめ、また後半 2.3.2 では、中国語に於いて「動詞中置」は統辞構造全体を統治する根本的な統辞原則であるとの認識を得た。この両者はしかしその性格に於いて理論的に異なる：前者は個々の「データ」による文法の規則の「モデル化」でそれ自体は何も「説明」しないのに対し、後者は仮説的陳述にささえられてある種の文法現象——ここではいくつかの関連した統辞構造の歴史的变化——を一定の範囲で「説明」できるからである。³¹⁾

しかしながら、上記の「モデル化」は少なくとも中国語、あるいは言語一般には「文法」という「規則性」が必要なものであるという「仮説」を前提にしており、この仮説はやはり全体としてある「文法理論」の一部を構成しているのである。また逆に、上記の統辞原則を仮定することは他の現象は説明するが、この原則自身については、その存在理由、統辞上の機能等に関して依然として何の説明も加えていない。新たな、より高次の段階に於ける研究の必要性がここにある。

このように、「理論」は常に段階性を伴い、ひとつの研究の成果は同時に次の研究の始

31) ここで使われている「原則」という概念からして既に「仮説的」である。

まりを意味する。つまり、研究者には常に新たなる挑戦が待ち構えているのだと言えよう。こうして未知のネット・ワークがひとつひとつ埋められていった時、対象の全体像がようやく浮かび上がってくるのである。

3. 言語学の目標

これまでの考察で、我々は常に「理論」の構築を物事の「真理」に迫るための手段として扱ってきた。この意味で「文法理論」は「文法」の真の姿を把握しようとするものに他ならない。「ニュートンの法則」と呼ばれる物理学理論が「重力」という理論上の創造体を仮定することによって「物体の落下」という現象を「説明」しているのと同様に、「文法理論」は「文法」の理論的再構によって究極的には「二者間コミュニケーション」という現象——少なくともその一部——を「説明」しようとしていると考えられるのである。

また、「物体の落下」は「物体」のあるひとつのアスペクトであることから、「ニュートンの法則」も「物体」の全アスペクトを明らかにして「物体とは何か？」の問いに迫っていかうとする「一般物理学」からみればその一端を担う「部分理論」ということができる。

こう考えてくると、「文法理論」を部分理論としてかかえる「一般言語学」の最終目標もおのずから彷彿としてくる。すなわち、言語学を経験科学と見なす以上、その目的も、究極的に「言語とは何か？」という問いに適確な答を見出すことにあると考えられるわけである。つまり、「言語」という現象をさまざまな角度から考察し、その「本質」をつかむということになる。

しかし、言語の「本質」を問題にする時、それが個別言語、いわんやその表層の特性を直接主眼として伝々すべきものでないことは明らかである。やはり個別言語の枠を越えて言語のもつ普遍的特性をもって「本質」と呼ぶ方が自然と言うべきだろう。つまり、言語学の最終目標は具体的には「言語普遍論」の追求にあると言えるのである。

実際問題として、一見表層ではこれほど差異の大きい各個別言語がほぼ同一と認められるような機能を果し得ているという事実は正に驚異的とさえ言える。しかし、SAUSSURE (1916) の意味での「言語の記号性」並びに「記号の恣意性」を合わせ考える時、表層の差異は実際上コミュニケーションの機能に支障をきたさないことは明白となる：³²⁾

- (30) "A systematic analysis of any language can be achieved only on a strictly synchronic basis and with the aid of analytical comparison i. e. comparison

32) 体系的な意味での「構造」という点については、同一の機能、またこれを支える「内容」の均一性を反映して「表層」も多くの点で普遍性を体現していることは FUJII (1986) で既に扱っている。

of languages of different types without any regard to their genetic relation. [...] the only way of approach to different languages as strictly comparable systems is the functional point of view, since general needs of expression and communication, common to all mankind, are the only common denominators to which means of expression and communication, varying from language to language, can reasonably be brought.”

(from: MATHESIUS 1936: 95)

つまり、自然言語はどんな表層構造をもつにしても音声コミュニケーションを成立させるための条件は最低限備えていると考えられるのである。そして機能という概念は言語普遍論研究にあっては常に念頭に置くべきであろう。

4. 結 語

以上、我々は「文法理論」を中心にして「経験性」という概念を「科学」の根本に据えて論を進めてきた。「科学」とは物事の真理を追求しようとすることである。そして、その真理へは我々の「経験」を通してしか近づけない：

- ③) “Das Universale in dieser Sicht wäre somit ein ewiges Programm für weitere Forschung, das immer mehr Zusammenhänge aufdeckt und dabei immer weitere Bereiche einbezieht.”

(from: SEILER 1974: 12)

「普遍性」の追求こそ、我々の「科学」する態度そのものと言える。「言語学的経験論」を提唱する所以である。

REFERENCES

- ARENS, H. (1969), *Sprachwissenschaft: Der Gang ihrer Entwicklung*, Frankfurt/M.
 BECHERT, J. (1976), ‘Bemerkungen zu Greenbergs “Basic Order Typology”’, in: *Papiere zur Linguistik* 10, pp. 49-66.
 COSERIU, E. (1972), *Die Geschichte der Sprachphilosophie von der Antike bis zur Gegenwart: Eine Übersicht*, Tübingen.
 DRAGUNOV, A. A. (1952), *Issledovanija po grammatike sovremennogo kitajskogo jazyka*, (Ger. transl.: Berlin 1960).
 FUJII, F. (1983), *Der sprachtypologische Status des Chinesischen und seine Implikationen* (=Ph. D. Thesis, Univ. of Munich).

- (1984), Zur theoretischen Grundlage der sprachlichen Typologie, unpubl. M. S.
- (1985), 'On the Status quo of German Linguistics', in: *Artes liberales* 37, pp. 37-50.
- (1986), 'On the Dynamism of Language — Interrelationship between Communication and "Grammar"', in: 「東西文化の諸相」(=昭和60年度特定研究報告書), Morioka 1986, pp. 107-127.
- GIVON, T. (1979), *On Understanding Grammar*, New York *et al.*
- GREENBERG, J. H. (1963), 'Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements', in: GREENBERG, J. H., ed., *Universals of Language*, London 1963; 1966, pp. 73-113.
- HAWKINS (1979), 'Implicational Universals as Predicators of Word Order Change', in: *Language* 55, pp. 618-648.
- (1980), 'On Implicational and Distributional Universals of Word Order', in: *Journal of Linguistics* 16, pp. 193-235.
- KEMPSON, R. M. (1975), *Presupposition and the Delimitation of Semantics*, London/New York.
- LEHMANN, W. P. (1971), 'On the Rise of SOV Pattern in New High German', in: SCHWEISTHAL, K. G., ed., *Grammatik, Kybernetik, Kommunikation*, Bonn 1971, pp. 19-24.
- (1972), 'Contemporary Linguistics and Indo-European Studies', in: *Publications of the Modern Language Association* 87, pp. 976-993.
- LI/THOMPSON (1974), 'Historical Change of Word Order: A Case Study in Chinese and its Implications', in: ANDERSON/JONES, eds., *Historical Linguistics I*, Amsterdam 1974, pp. 199-218.
- (1974a), 'An Explanation of Word Order Change SVO→SOV', in: *Foundation of Language* 12, pp. 201-214.
- (1976), 'On the Issue of Word Order in a Synchronic Grammar: A Case against "Movement Transformation"', in: *Lingua* 39, pp. 169-181.
- (1976a), 'Development of the Causative in Mandarin Chinese — Interaction of Diachronic Processes in Syntax', in: SHIBATANI, M., ed., *The Grammar of Causative Constructions* (=Syntax and Semantics 6), New York *et al.*, pp. 477-492.
- (1977), 'A Mechanism for the Development of Copula Morphemes', in: LI, Ch. N., ed., *Mechanism of Syntactic Change*, Austin/London 1977, pp. 419-444.
- MATHESIUS, V. (1936), 'On Some Problems of the Systematic Analysis of Grammar', in: *Travaux du Cercle Linguistique de Prague* 6, pp. 95-107.
- MONTAGUE, R. (1974), *Formal Philosophy — Selected Papers Richard Montague*, ed. by R. H. THOMASON, New Haven/London.
- POPPER, K. R. (1934), *Logik der Forschung*, Tübingen.
- RIES, J. (1931), *Was ist ein Satz?*, Prag.
- SAUSSURE, F. (1916), *Cours de linguistique générale*, Paris/Lausanne (Ger. transl.: Berlin 1932).
- SCHMIDT, P. W. (1926), *Die Sprachfamilien und Sprachkreise der Erde*, Heidelberg.
- SEIDEL, E. (1935), *Geschichte und Kritik der wichtigsten Satzdefinitionen*, Jena.
- SEILER, H. (1973), 'Das Universalienkonzept', in: SEILER, H., ed., *Linguistic Workshop 1* (=Structura 4), München, pp. 6-19.
- VENNEMANN, Th. (1972), 'Analogy in Generative Grammar — The Origin of Word Order' in: *Proc. of 11th Int. Congr. of Linguists*, Bologna 1972, Vol. 2, pp. 79-83.

(本稿は昭和60年度科学研究費「総合研究A、『テキスト分析の研究』, 代表 協阪豊」の補助を受けて行なわれた研究の一部である。)